

研究紀要

第68集

目 次

はじめに	山本 一	
研究概要 全体論	加納 篤	2

考える子を育む

—問い合わせつながる授業—

理論と実践

国語科	坂井 昇・加納 篤・登美いづみ	8
社会科	泊 和寿・澤田 兼祐	20
算数科	服部 美雪・石田 美保・福井 時昌	34
理科	小網 達也・中前 元久・森田健太郎	46
生活科	中川 好美・山岸 留美	60
音楽科	西村真理子・笹谷真理子・徳田 典子	70
図画工作科	齊藤江利子	82
家庭科	中田 泉	86
体育科	北 豊・島貫 由郷	90
道徳	太田ちはる・北野 美紀	98
英語	堀井 洋一	106
情報教育	杉森 慎一	110
健康教育	吉本 貴世	116

おわりに

的場 茂樹

平成26年(2014年)11月

金沢大学附属小学校

はじめに

本校では、今年度から新しいテーマ「考える子を育む」によって学校研究を進めております。一年目の今年は、サブ・テーマを「問い合わせつながる授業」とし、それぞれの教科等における授業のあり方を模索しながら、実践と検討を積み重ねてきました。

新しいテーマは、昨年度までの4年間のテーマ「である・つながる・うまれる コミュニケーション」を、ある面で引き継いでいます。そこでは、子どもの思考の深まりを支援するコミュニケーションのあり方を探求し、意見の交流を通じて子どもの思考がどのように発展するか、他からの刺激に応じてどのように新しい知識を生み出すかを、考察してきました。新しいテーマは、この「子どもの思考」を「考える子」という形で捉え直し、思考する子どもを育む実践のあり方を探るものと言えましょう。

言うまでもなく、学びは社会的・集団的なものです。他者とのつながり、交流、時には葛藤を経て、学びは発展します。このような学習の共同的側面を大切にすることは、学校教育に携わる者にとっての基本中の基本であると言えるでしょう。

他面、どのように価値のある知識も、考える営みを通じてその人自身のものにならなければなりません。つまり、学びの主体は一人一人の「考える人」なのです。二十世紀以降、それまでのいわゆる近代的・西欧的な「個人」や「主体」という考え方には、さまざまな面から相対化され、批判されてきました。しかし、そのような難しい議論をいったん離れて素朴に経験を顧みれば、ものを考え、ものを学ぶのが一人一人の人間であり、個人であることは、あたりまえの現実です。いかに現代において、高性能コンピューターの活用や、それによる大規模な知識の集積と組織化・共有化が進展しているといっても、あるいはそうであればなおさら、この素朴な現実を忘れ去るべきではありません。さもなければ、教育・学問そして人間社会は、その本来の姿を失ってしまうでしょう。

本校の今年度の研究は、「考える子」の姿にこだわりながら、教室の中での「つながり」を創出しようとしています。それは、共同性と個人性という学びの両面を、ともに大切にしたいという願いを基盤にしているのです。もとより私たちの研究はまだまだ未熟で、手探り状態のところがたくさんあります。どうか、皆様には忌憚のないご批判、ご意見、ご教示をお願いしたいと思います。それを踏まえて、来年度の発展へ向けての準備を重ねていきたいと考えています。

最後に、いつも本校の研究を支えていただいている多くの皆様に心より感謝申し上げ、今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願いして、巻頭の言葉といたします。

平成 26 年 11 月

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校
校長 山本 一